

## 生徒指導論の現代的課題：今の子ども・青年の状況に関わって

著者	本間 真宏, 相良 麻里
雑誌名	東京家政大学研究紀要 1 人文社会科学
巻	46
ページ	121-129
発行年	2006
出版者	東京家政大学
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1653/00009194/">http://id.nii.ac.jp/1653/00009194/</a>

# 生徒指導論の現代的課題 — 今の子ども・青年の状況に関わって —

本間 真宏\*, 相良 麻里\*\*  
(平成 17 年 10 月 6 日受理)

## Contemporary Tasks to be Achieved by School Guidance: Concerning Circumstances of Children and Youths of Today

HONMA, Masahiro and SAGARA, Mari  
(Received on October 6, 2005)

キーワード：生徒指導・発達課題・教員養成

Key words: school guidance, developmental tasks, teacher training

### はじめに

学校教育における主要な任務が教科指導にあることはいうまでもないことであるが、教師にとって生徒指導、すなわち生徒の生活指導にかかわる部分もまた重要な職務であるといえよう。

教員養成を建学当初から女子の中心的な教育としてきた本学において、筆者のひとり本間は家政学部児童学科及び短期大学部保育科における保育士養成の福祉関係科目を担当してきた。それが2001年度のカリキュラム改訂によって児童学科児童教育専攻に「社会福祉実習」が選択科目として設置されることになり「幼少教員養成」科目にプラスして「福祉系科目」が相当数、設けられることになったのであった。81名の学生が71カ所の児童相談所や福祉事務所等で実習したのである<sup>1)</sup>。その間の状況については別稿<sup>2)</sup>をみていただきたいが、教員養成における福祉教育の重要性を知ったことは大きな収穫であった。

相良は“教職教養科の教職課程”の実務を担当してきた<sup>3)</sup>。そのなかで1997年より施行された「介護等体験」の履修指導のあり方について考えながら、これからの教育実習指導のより効果的な方向を目指してきた。

こうした二人が本稿において「生徒指導」の現代的課題について共同で考えてみようとするものである。

### I 生徒指導とは何か

生徒指導は生徒理解に始まり、生徒理解に終わるといふ<sup>4)</sup>。ここで「生徒理解」とは教育の主体である子ども達の人間的な発達をどのように理解し対応するかということであろう。そのための作業として、まず発達課題について検討を加えてみることにしたい。

#### 1) 発達課題とは

私(相良)はかつて「人間の発達と教育—子どもの発達特性と学校教育に関わって—」というテーマで発達課題について発表したことがある<sup>5)</sup>。そこではR・J・ハヴィガーストによって児童期(およそ6才から12才頃まで)における発達特性をみておいた。

すなわち、児童後期には青年期にみられる身体的特徴が現われてくるが、精神的には未だ児童期のものを残しているという。そして、この時期には心身の安定した発達が進行していくとともに、様々な能力や特性が形成されていくともいう。この時期は学童期とも重なっている。ということは学校生活における学習活動や友人との集団活動が発達課題の達成に大きなウェイトを占めているということである。ハヴィガーストのいう児童期の発達過程は以下の九項目である。

- ①普通のゲーム(ボール遊び、水泳)に必要な身体的技能の学習
- ②成長する生活体としての自己に対する健全な態度の育成

\* 児童学科 保育科 社会福祉研究室

\*\*教職教養科 教職指導室

- ③同年齢の友達と仲良くすることの学習
- ④男子または女子としての正しい役割の学習
- ⑤読み、書き、計算の基礎的技能を発達させること
- ⑥日常生活に必要な概念を発達させること
- ⑦良心、道徳性、価値の尺度を発達させること
- ⑧人格の独立性を発達させること（自主的な人間形成）
- ⑨社会的集団並びに諸機関に対する態度を発達させること

これらの発達課題は学校生活と密接に結びついており、学校での教育活動をベースとして、活動の広がりのおかげで発達課題が履行され達成されなければならない。

また、これらの発達は身体的・知的・社会的という三側面から考えてみるができる。ここで身体的発達は1および2に相当し、知的発達は5に、そして残りは社会的発達として学校生活における学習活動、集団活動・行動を通しての、生きた体験・経験によって達成しうる課題といえるのである。次に、このような発達課題の必要性について考えてみよう。

## 2) 発達課題の必要性

子どもは学習し、教育を受けながら文化を自分のものにしていく。文化は内面化しながら人間的能力をつくり、発達していく<sup>6)</sup>。学習・教育はいわば子ども・人間の人間の発達保障であり、技能なのである。

ところで、学校教育において「生活指導の位置」は、法的な意味で明確に定められてはいないという<sup>7)</sup>。

そして、生活指導と類似して用いられる「生徒指導」という言葉は、行政用語（官庁用語）とでもいうべきものであり、法律では教育委員会の職務権限に関して使用されているのみである<sup>8)</sup>という。さらに文部科学省は「生徒指導」という言葉にこだわっているため、小学校教育においても「生徒指導」という言葉を用いるという矛盾も生じているという<sup>9)</sup>。

けれども、小学校、中学校、高等学校についての「学校教育法」の規定をみると、17条、35条、41条の何れにおいても「心身の発達にに応じて」という表記がなされており、そこに私たちは「発達課題」の必要性を認めるのである。

## 3) 発達課題的視点と生徒指導

これまで述べてきたような発達課題についての意味を

ふまえ、生徒指導における留意点についての考えてみることにしたい。まず本学において「生徒指導論」を担当している教員のシラバスをみてみよう<sup>10)</sup>。授業の概要として「学校教育の使命は、教科指導と生徒指導のバランスのとれた発展にある」とし、「青年期は、単なるおとなへの準備、移行期ではなく、発達上、独自の意味を持つ重要な時期である」という。

そして「子どもの発達に学校ができることはなんなのか、集団教育の中でどんな方法が有効か、子どもの個性や資質、興味関心にそった発達を促すための援助である進路指導はどうあるべきか」として次のような項目を列挙している。

- 1) 憲法、教育基本法、学習指導要領にみられる人間観
- 2) 「生徒指導の手引き」にみる人間観—人格の尊厳
- 3) 「生徒指導の手引き」にみる人間観—自己実現
- 4) 家庭教育力の低下—社会構造の変化と家庭の役割の変質
- 5) 家庭教育力の低下—子どもの「食」の現在
- 6) 学校の管理化・校則と体罰
- 7) いじめ — (1)
- 8) いじめ — (2)
- 9) 不登校と引きこもり
- 10) これからの性教育
- 11) 人権問題—人種差別、日本社会の閉鎖性
- 12) これからの進路指導
- 13) パーソナリティと社会化

上記のように生徒指導論で取り上げられる範囲はきわめて広い。そして授業に対する姿勢として「シラバス」には次のように書かれている。「従来はややもすると子どものしつけや規則、集団への一方的な適応要求ととらえがちであった生徒指導論を打破すること」である、と。

本論もそのような視点に立っていることはいうまでもない。

## II いまの子どもの意識と行動

私（相良）は、かつて現代青年の意識と行動について、その価値意識と自己形成をみながら論じたことがある<sup>11)</sup>。この節では、それをふまえて今の子どもたちの意識と行動について考察を加え、あわせて生徒指導論の課題をいくつか指摘してみることにしたい。

1) コミュニケーション能力について

さて、今日における子ども・青年の発達課題の達成は、非常に困難な状況になっている。それゆえ、学校から社会への移行過程には深刻な問題が広がっている。その背景には社会構造の変化、価値意識の変容に伴い、変化の揺れの大きい社会のもと、どのような自己像や社会像を見いだしていったらよいかが見えにくいということに要因の一つがあるように考えられる。

また、子どもをとりまく環境は、少子化、情報化の進展、価値観の多様化など、子ども自身が急激な社会の変化に翻弄され、自ら学び、考え、判断するなどの「生きる力」が不足しているといわれている。また、子どもの発想や生き方も画一的なものになりつつあり、子どもの生活体験の場が少なくなり、子ども同士・子どもと大人のコミュニケーション不足も指摘され、円滑な社会生活をおくる上で不可欠な人間関係におけるコミュニケーション能力の形成が阻害される傾向にある。そして、そのことに関わる問題行動も多数指摘されている。

ところで、コミュニケーション能力とは何であろうか。それは言語学において“communicative competence”の訳語である。この定義としてはCanale M and M Swain,のものがよく知られている<sup>12)</sup>。彼は次のように定義している。

- ①文法的能力Grammatical competence…文法的に「正しい」文を用いる能力。
  - ②談話能力Discourse competence …文の羅列ではない、意味のある談話・テキストを理解し、作り出す能力。
  - ③社会言語能力Sociolinguistic competence…言語が使用される社会的な文脈を判断して「適切な」表現を用いる能力で、社会的背景、互いの関係を判断して、会話の規則を適切に用いることのできる能力のことである。
  - ④方略的言語能力Strategic competence…コミュニケーションの目的をめざしてメッセージを伝達する対処能力。例えば、語彙や文法などの表現力の不足を補って言い換えや繰り返しや推測を行ったり、コミュニケーションの失敗を補って伝達するための方策などが含まれる。
- つまり、「読む、書く、聞く、話す」という4つの能力が統合されたものとしてバランスのとれたコミュニケーション能力が形成されると考えることができる。
- では、このコミュニケーション能力の低下はどのよう

な状況をまねくのであろうか。例えば、友人関係において、「遊ぼう」や「仲間に入れて」「ごめんさい」など、自分が思っていること、考えていることを相手に伝えることができない。また、逆に相手の思っていること、考えていることを理解できない。そのため、トラブルを引き起こしやすく、物事の本質を理解できないためパニックを起こす。すなわち、他者の存在の理解や他者の感情の推測などが十分できないために、他者との葛藤を解決することができないのである。そのために、他者と上手な距離感がつかめず、積極的にかかわろうとする意欲や態度は失われ、学校や社会から孤立しやすい。そして、不登校になったり、いじめの対象になりやすい。このようなコミュニケーション能力の低下を生み出す背景、要因は様々なものが複雑にからみあっているであろう。特に、子ども達を取り巻く環境、すなわち、家庭・学校・地域において、豊かな人間関係をや社会性を育成する生活の場面の中で、発達課題の達成に必要な経験・体験の不足の深刻化が大きく影響をしているのではないかと考えられる。

表1. 2の厚生労働省の児童環境調査(2001)によると家族そろって朝食・夕食をとる頻度を現わしている。

表1 一週間に家族そろって朝食を食べる頻度の割合 %

総数	毎日	4日以上	2~3日	1日だけ	ほとんどない	不詳
1751 (100)	452 (25.8)	154 (8.8)	360 (20.6)	186 (10.6)	582 (33.2)	17 (1.0)

表2 一週間に家族そろって夕食を食べる頻度の割合 %

総数	毎日	4日以上	2~3日	1日だけ	ほとんどない	不詳
1751 (100)	553 (31.6)	300 (17.1)	546 (31.2)	190 (10.9)	128 (7.3)	34 (1.9)

まず、表1をみると家族そろって朝食を食べる回数は、「ほとんどない」という回答が33.2%と最も多く、朝食時において孤食化が進んでいることが読みとれる。表2、夕食を食べる回数は「毎日」が最も多かったが、割合は31.6%と全体の約3割でしかない。

これらの表から、現代社会の家庭という場において、食事の団らんという親子のコミュニケーションの時間が、失われつつあることがうかがえる。これでは子どもは家庭で孤立化し、子どものコミュニケーション能力は育成されにくいであろう。なぜなら、コミュニケーション能

力は話したいことを話す経験、話したことを受け止めてもらえる経験の積み重ねによって強化されるからである。子どもが人間関係をはぐくむ場としての、家族とのコミュニケーション不足は、少なからず、その後のコミュニケーション能力に何らかの影響を与えるものと推察される。

それでは、子どもたちが、発達課題を履行するために、また、適切なコミュニケーション能力を形成していくためには、いったい何が必要なのであろうか。

後に、私たちは子どもたちの豊かな人間関係を育てるために（東京都教育委員会）が発達段階における子どもの特徴と課題をまとめたものを見ることになる。

2) 不登校・いじめについて

次に、今日子ども達の問題行動の状況についてみてお

こう。

文部科学省は学校を病気等の原因によらず年間30日以上欠席することを不登校としている。その数は小学校・中学校ともかなりの比率を示している。

表3、図1、表4の文部科学省の生徒指導指導上の諸問題についての調査結果をみてみよう。1997年から急激に増えつづけ、2000年にピークをむかえている。1992年、文部省は不登校はどの子にも起こりうるものとした。

さて、不登校が、現代の複雑な社会的な問題を背景に引き起こされる現象であることは、様々な統計から読みとることができるが、文部科学省「平成16年度生徒指導上の現状について」では、不登校が継続している理由としていくつかのトピックをあげている。列挙してみよう。

- ①学校生活上の影響
- ②遊びや非行

表3 不登校児童生徒数

区 分	小 学 校			中 学 校			計		
	(A) 全児童数 (人)	(B) 不登校児童数 (人) カッコ内 (B/A×100) (%)	不登校児童数の増▲減率 (%)	(A) 全生徒数 (人)	(B) 不登校生徒数 (人) カッコ内 (B/A×100) (%)	不登校児童数の増▲減率 (%)	(A) 全児童生徒数 (人)	(B) 不登校児童生徒数の合計 (人) カッコ内 (B/A×100) (%)	不登校児童生徒数の増▲減率 (%)
3年度	9,157,429	12,645 (0.14)	-	5,188,314	54,172 (1.04)	-	14,345,743	66,817 (0.47)	-
4年度	8,947,226	13,710 (0.15)	8.4	5,036,840	58,421 (1.16)	7.8	13,984,066	72,131 (0.52)	8.0
5年度	8,768,881	14,769 (0.17)	7.7	4,850,137	60,039 (1.24)	2.8	13,619,018	74,808 (0.55)	3.7
6年度	8,582,871	15,786 (0.18)	6.9	4,681,166	61,663 (1.32)	2.7	13,264,037	77,449 (0.58)	3.5
7年度	8,370,246	16,569 (0.20)	5.0	4,570,390	65,022 (1.42)	5.4	12,940,636	81,591 (0.63)	5.3
8年度	8,105,629	19,498 (0.24)	17.7	4,527,400	74,853 (1.65)	15.1	12,633,029	94,351 (0.75)	15.6
9年度	7,855,387	20,765 (0.26)	6.5	4,481,480	84,701 (1.89)	13.2	12,336,867	105,466 (0.85)	11.8
10年度	7,663,533	26,017 (0.34)	25.3	4,380,604	101,675 (2.32)	20.0	12,044,137	127,692 (1.06)	21.1
11年度	7,500,317	26,047 (0.35)	0.1	4,243,762	104,180 (2.45)	2.5	11,744,079	130,227 (1.11)	2.0
12年度	7,366,079	26,373 (0.36)	1.3	4,103,717	107,913 (2.63)	3.6	11,469,796	134,286 (1.17)	3.1
13年度	7,296,920	26,511 (0.36)	0.5	3,991,911	112,211 (2.81)	4.0	11,288,831	138,722 (1.23)	3.3
14年度	7,239,327	25,869 (0.36)	-2.4	3,862,849	105,383 (2.73)	-6.1	11,102,176	131,252 (1.18)	-5.4
15年度	7,226,910	24,077 (0.33)	-6.9	3,748,319	102,149 (2.73)	-3.1	10,975,229	126,226 (1.15)	-3.8
16年度	7,200,933	23,310 (0.32)	-3.2	3,663,513	100,007 (2.73)	-2.1	10,864,446	123,317 (1.14)	-2.3

(注)調査対象:国・公・私立小・中学校

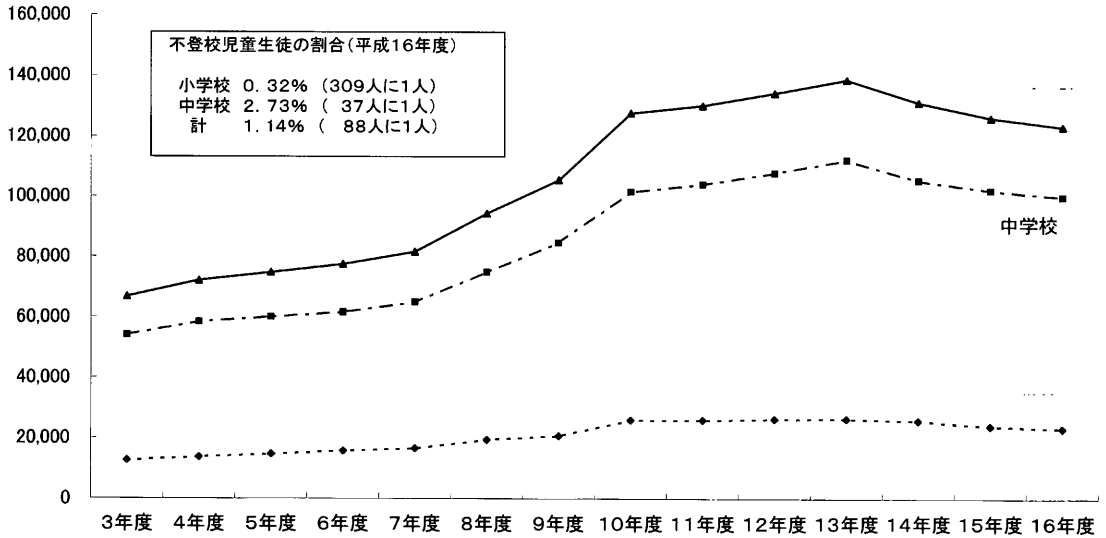


図1 不登校児童生徒数の推移

- ③無気力
- ④不安などの情緒的混乱
- ⑥意図的な拒否などである。
- ⑦複合

このように不登校になった要因には様々なものがあることが伺える。

そのための解決の方策も個々に応じて吟味していかなければならない。まず、不登校を解決するための一つの大きな目標は、将来的な社会的自立に向けて支援することである。したがって、不登校を「心の問題」としてのみとらえるのではなく、「進路の問題」としてとらえ、本人の進路形成に役立つような指導・相談や学習支援が求められ、それらが子どもを不登校から抜け出させる事の足がかりになると考えられる。そのためには、自ら学び自ら考える力・基本的な生活習慣、規範意識、集団における社会性など、将来社会においてより良い成員となるために必要な資質や能力等を、それぞれの発達段階に応じて、どのように達成・育成していったら良いのかを常に念頭において指導していくことが必要なのである。

いじめの問題については、これまで家庭、学校、社会全体の大きな課題として様々な取り組みがなされてきた。

表4の文部科学省の調査でも、1996年をピークにいじめの件数は減少したものの、その発生件数はいまだ高い値である。

しかしながら、以然としていじめを起因にした事件が、

日常的にメディアにて報道されることから、見かけの件数は減少したものの学校においては、いわゆる事件に至っていない、いじめが日常的に起こっているのではないかと推察される。学校は、集団生活の中で常にいじめが起こりやすいという認識をもち、積極的に注視し、対応していかなければならない。

生徒指導は、学校の教育目標を達成するための重要な機能の一つである。それぞれの子どもの人格の、より健康な発達のため、学校生活が有意義で興味深く充実したものになることを目指している。

不登校・いじめなどの問題行動そのものを直接解決しようという消極的な生徒指導も重要ではあるが、問題行動そのものを未然に防ぐための心を育てる積極的生徒指導という視点が必要とされている。そして、やはり発達段階に応じた課題の達成、すなわち、各発達段階における心理的特性や行動など、それぞれの発達課題をふまえた上で多面的に子どもを理解していくことが大切なのである。

これからの学校は、子どもの個性を伸ばし、豊かな心を育てるため、家庭や地域との連携を十分に図り、特色ある開かれた学校づくりを推進していくことが急務となっている。個々の子どもの実態を正しく理解し、様々な困難な事態の中にあろうとも、望ましいパーソナリティ形成が阻害されることのないように、学校生活の中で子ども達と積極的に関わること、すなわち学校生活を充実

表4 いじめの発生学校数・発生件数

区分		公立学校総数:A(校)	発生学校数:B(校)	発生率:B/A×100(%)	発生件数:C(件)	発生件数の増▲減率(%)	1校あたり発生件数:C/A(件)
小学校	平成6年度	24,390	7,626	31.3	25,295	-	1.0
	平成7年度	24,302	8,284	34.1	26,614	5.2	1.1
	平成8年度	24,235	6,638	27.4	21,733	▲18.3	0.9
	平成9年度	24,132	5,182	21.5	16,294	▲25.0	0.7
	平成10年度	24,051	4,118	17.1	12,858	▲21.1	0.5
	平成11年度	23,944	3,366	14.1	9,462	▲26.4	0.4
	平成12年度	23,861	3,531	14.8	9,114	▲3.7	0.4
	平成13年度	23,719	2,806	11.8	6,206	▲31.9	0.3
	平成14年度	23,560	2,675	11.4	5,659	▲8.8	0.2
	平成15年度	23,381	2,787	11.9	6,051	6.9	0.3
平成16年度	23,160	2,671	11.5	5,551	▲8.3	0.2	
中学校	平成6年度	10,568	5,810	55.0	26,828	-	2.5
	平成7年度	10,551	6,160	58.4	29,069	8.4	2.8
	平成8年度	10,537	5,463	51.8	25,862	▲11.0	2.5
	平成9年度	10,518	5,023	47.8	23,234	▲10.2	2.2
	平成10年度	10,497	4,684	44.6	20,801	▲10.5	2.0
	平成11年度	10,473	4,497	42.9	19,383	▲6.8	1.9
	平成12年度	10,453	4,606	44.1	19,371	▲0.1	1.9
	平成13年度	10,429	4,179	40.1	16,635	▲14.1	1.6
	平成14年度	10,392	3,852	37.1	14,562	▲12.5	1.4
	平成15年度	10,358	3,934	38.0	15,159	4.1	1.5
平成16年度	10,317	3,774	36.6	13,915	▲8.2	1.3	
高等学校	平成6年度	4,163	1,564	37.6	4,253	-	1.0
	平成7年度	4,164	1,650	39.6	4,184	▲1.6	1.0
	平成8年度	4,164	1,504	36.1	3,771	▲9.9	0.9
	平成9年度	4,164	1,285	30.9	3,103	▲17.7	0.7
	平成10年度	4,160	1,233	29.6	2,576	▲17.0	0.6
	平成11年度	4,148	1,133	27.3	2,391	▲7.2	0.6
	平成12年度	4,145	1,151	27.8	2,327	▲2.7	0.6
	平成13年度	4,146	1,050	25.3	2,119	▲8.9	0.5
	平成14年度	4,136	1,029	24.9	1,906	▲10.1	0.5
	平成15年度	4,117	1,094	26.6	2,070	8.6	0.5
平成16年度	4,093	1,115	27.2	2,121	2.5	0.5	
特殊教育諸学校	平成6年度	905	95	10.5	225	-	0.2
	平成7年度	905	98	10.8	229	1.8	0.3
	平成8年度	913	88	9.6	178	▲22.3	0.2
	平成9年度	917	72	7.9	159	▲10.7	0.2
	平成10年度	923	71	7.7	161	1.3	0.2
	平成11年度	928	59	6.4	123	▲23.6	0.1
	平成12年度	932	57	6.1	106	▲13.8	0.1
	平成13年度	936	50	5.3	77	▲27.4	0.1
	平成14年度	933	43	4.6	78	1.3	0.1
	平成15年度	935	45	4.8	71	▲9.0	0.1
平成16年度	939	39	4.2	84	18.3	0.1	
計	平成6年度	40,026	15,095	37.7	56,601	-	1.4
	平成7年度	39,922	16,192	40.6	60,096	6.2	1.5
	平成8年度	39,849	13,693	34.4	51,544	▲14.2	1.3
	平成9年度	39,731	11,562	29.1	42,790	▲17.0	1.1
	平成10年度	39,631	10,106	25.5	36,396	▲14.9	0.9
	平成11年度	39,493	9,055	22.9	31,359	▲13.8	0.8
	平成12年度	39,391	9,345	23.7	30,918	▲1.4	0.8
	平成13年度	39,230	8,085	20.6	25,037	▲19.0	0.6
	平成14年度	39,021	7,599	19.5	22,205	▲11.3	0.6
	平成15年度	38,791	7,860	20.3	23,351	5.2	0.6
平成16年度	38,509	7,599	19.7	21,671	▲7.2	0.6	

(注) 調査対象は、公立学校。

させる努力がより一層のぞまれる。

子どもの人間的成長・発達課題を再検討し、自己実現化への資質の育成を発達課題の視点から教育的に活用し指導することが、今、学校教育に求められている生徒指導の課題であるといえるのである。

### Ⅲ 発達課題を達成するために

今、子ども・青年の発達課題の達成が困難な状況になってきていることを指摘してきた。今の社会を「希望格差社会」<sup>13)</sup>と呼び「勝ち組」と「負け組」という二極化していく状況を描き出した研究者がいる。将来に希望を見いだせない子どもや青年たちはもとより多くの教師が様々な問題と向き合い試行錯誤している。教育は決して完全なものではないが、完全さをめざして模索していくものではなかろうか。

さきに、子どもたちの豊かな人間関係を育てるために東京都教育委員会<sup>14)</sup>の発達段階における子どもの特徴と課題をまとめたものをみる必要があるといった。それをここでまとめてみることにしたい。

#### 1) 発達課題における子どもの特徴と課題

##### イ) 乳幼児期

この時期は、周りの大人、とくに家族が温かく愛情をもって接することによって、安心感をもち、人に対する信頼感がはぐくまれる。人間として自立していくための基礎となる諸機能の発達が促進される。

また、大人との信頼関係に支えられながら、自立に向かって歩む時期となる。人との関わり合いも家族から友人へと広がっていく。遊びはこの時期の子どもにとって生活そのものであるといえよう。

##### ロ) 低学年(学童期前期)

この時期は、行動範囲が急速に広がっていく時である。同時に対人関係の難しさも感じ取り、自己をむかえる力が育つ。手伝いや係り活動など、家庭や学級で役割を持たせ「自分も役に立っているんだ」という体験をさせることが重要である。また集団活動を通して社会性を身につけていくことが必要である。

##### ハ) 高学年(学童期後期)

この時期は社会の一員としての自覚が一層高まる。自分の意見をもち、他者と対立する場面も生じる。地域社

会での体験・責任をもって仕事を行なう体験が重要。自分と異なる世代・年代の人々と交流することにより、豊かな心や人間性をはぐくんでいく。とくに家庭での親子の会話が大切である。

##### ニ) 中学生(思春期)

この時期における一番の課題は、社会の形成者としての基礎的な態度の確立である。ときには親や教師に反発する。乳幼児期からはぐくまれてきた生活習慣や規範意識がゆらぎやすい。それを大人たちがしっかり受け止めることが必要である。親や教師の連携を図るネットワークが必要とされる。

##### ホ) 高校生(青年期)

この時期は、独立したいという欲求がある反面、このままでもいいという気持ちもみられる。豊かな人間関係を結ぶ機会や多様な活動の場面を用意し、自分の生涯の生き方を自己決定できるようにしていかななくてはならない。一人一人の自己実現化を目指していかなければならない。

では、このような子どもの特徴と課題をふまえて、子ども・青年の豊かな人間関係を育てるために、家庭・学校・地域社会はどのような視点を持ち、その役割を果たしていったらよいのであろうか。

#### 2) 家庭・地域・学校の役割

##### イ) 家庭の役割

家庭内では、年齢に応じた生活体験を十分にできるようにしたい。そして、①基本的な生活習慣を身につけること。②一日の生活を振り返る親子のコミュニケーションの場をつくること。③家庭内においてやすらぐこと、の3つの事柄に留意しなくてはならない。そして、これらを実行するためには、親が、子どもの社会性を育成するということを今一度意識し直すことが必要である。

##### ロ) 地域の役割

子ども達が安心して遊ぶことのできる環境を保障したい。そして、①遊ぶ時間の保障。②遊ぶ仲間の保障、の2つが必要である。現代の子ども・青年は学習塾通いやお稽古などの時間に追われ、放課後友達と遊ぶ時間が少ない。このような遊び体験の欠損は社会性の発達を阻害しかねない。地域社会では、子ども会活動の活性化を積極



的に支援していくことも併せて考えていくことも大切である。

#### ハ) 学校の役割

学校は子ども同士の間関係や社会性を育てるために、人間関係体験やコミュニケーション体験を学校生活の中で、とりわけ集団での指導を大切にしていくことが必要である。近年、受験が唯一の教育目標であるかのような考え方が蔓延し、知識の習得のみに時間を費やす傾向にある。生徒指導は消極的生徒指導化し、細かな校則を定め、学校は子どもたちの生活を保護し管理することに追われている。本来、すべての教科の根底に横断的に横たわっているのが生徒指導なのである。積極的生徒指導という視点にたち、個と集団をマクロ的視点及びミクロ的視点から丁寧に理解していくことが学校、教師に求められているのである。

#### おわりに

現代社会における、子ども・青年は発達段階で体験すべきことができず、発達課題の達成が困難な状況になってきている。発達課題の達成をなくして、子ども・青年の将来はありえない<sup>15)</sup>。また、子どもや青年の将来をみとおした視点から、現在の教育の在り方を考えなくてはならない<sup>16)</sup>。子ども・青年の問題行動に関する研究は、とかく、子ども・青年のマイナス面を強調しているようにみられがちであるが、決してそれだけではないことをいわなくてはならない<sup>17)</sup>。

これらの点をふまえ、私たちはこれからも効果的な教員養成にたずさわっていくつもりである。

#### 註

- 1) 東京家政大学児童学科児童教育専攻「2002年度社会福祉実習」報告「出会い・スタートですー教育と福祉の統合をめざして」第1号 2003
- 2) 保延・三角・深田「幼少教員養成と社会福祉実習」東京家政大学研究紀要第44集(1)所収 2004
- 3) 相良麻里「教育実習に関する課題についてー学生の意識調査からー」東京家政大学研究紀要第45集(1)

所収 2004

- 4) 佐々木正昭「生徒指導の根本問題ー新しい精神主義に基づく学校共同体の構築」日本図書センター 2004 p11
- 5) 相良麻里「人間の発達と教育ー子どもの発達特性と学校教育に関わってー」東京家政大学研究紀要第44集(1)所収 2004
- 6) 川瀬八洲夫「教育と社会ー人間観の発達と公教育の展開ー」垣内出版 1991 p286
- 7) 岩本・浪本(編)「資料 生徒指導を考える」北樹出版 2005 p24
- 8) 「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」第23条5項, 第48条2項2号, 「学校教育法施行規則」52条の2
- 9) 岩本・浪本(編)「資料 生徒指導を考える」北樹出版 2005 p24
- 10) 菊入三樹夫「生徒指導論」シラバス 2005
- 11) 田中麻里「現代青年の意識と行動ー価値意識と自己形成に関わって」東京家政大学研究紀要第35集所収 1995
- 12) Canale M and M Swain, Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing” in Applied Linguistics 1, 1-47 1980
- 13) 山田昌弘「希望格差社会『負け組』の絶望が日本を引き裂く」筑摩書房 2004 同「パラサイトシングルの時代」筑摩書房 1999
- 14) 東京都教育委員会「東京都教育ビジョン」2004
- 15) 畠中宗一(編)「子どものウェルビーイング」『現代のエスプリ』No453 至文堂 2005 における座談会で、本間は今の子どもたちの状況について発言している。
- 16) 田中麻里「青年期教育における現代的課題(1)ー望ましいパーソナリティ形成の今日の条件」東京家政大学研究紀要第36集所収 1996
- 17) 本間「社会福祉論ー愛・居場所・コミュニティ」相川書房 2004

**Abstract**

It is necessary for teachers to cope with problems of pupils sufficiently by using expert knowledge of "school guidance" as well as "developmental tasks" of individuals, so that children can grow up and develop appropriately.

The aim of the present paper is to examine what kind of assistance teachers ought to give to help pupils attain "self-actualization".